

日本生育外国人児童の「出来事作文」にみられるねじれ文の分析  
—接続形式「て」に注目して—

工藤聖子 (東京学芸大学院修了)

1. 研究の目的

2-6年生の作文中のねじれ文の出現状況、経年変化を日本人児童(以下J)と比較し、日本生育外国人児童(以下F)の「文を産出する力」の発達上の課題を明らかにする。

2. 研究の価値・意義

作文中の複文に焦点を当て、Fのねじれ文を分析し、今後の教育現場における作文指導への示唆を得ることを目的とする。

3. 研究方法

分析対象: 同一児童の出来事作文 対象作文数: F 215件、J 95件

児童の民族的背景: ベトナム、中国、カンボジア、ラオス、フィリピン

方法: ①ねじれ文を抽出し、出現数とタイプを分析 ②複文中の接続形式としての動詞テ形文の使用状況と機能を分析

4. 結果と考察

結果① ねじれ文の出現状況は2年でF(6.72%)とJ(2.86%)に大きく差があるが、6年では、F

(2.55%)とJ(2.86%)

は、ほぼ並んでいた。

しかし、タイプは図1

と2のように異なる。6

年で、Jは過剰タイプが

1文のみなのに対し、F

は6年まで継続して一

定数過剰タイプが見ら

れ、高学年になっても何らかの

語句を重複して使う傾向がある。

結果② 複文中の動詞テ形文の分析では、4年以外、テ形を使用する割合はFがJを上回った。特に6年では、Fが63.18%、Jは37.17%とその差は大きい。また、機能は、Fは2-6年まで継起としての使用が多い。一方Jは徐々に継起以外の理由や付帯状況を表すテ形文が増え、6年には継起(10.62%)より理由(12.39%)が上回る。

文構造の特徴として、Fは高学年になってもテ形で文を繋げ、その機能も継起として使用する傾向がみられることから、過剰タイプや挿入タイプのねじれ文を産出しやすい文構造をしている可能性がある。

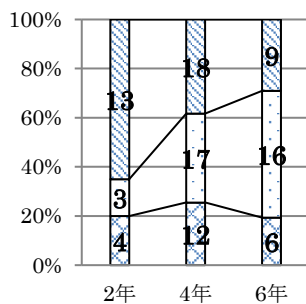


図1 タイプ別 (F)

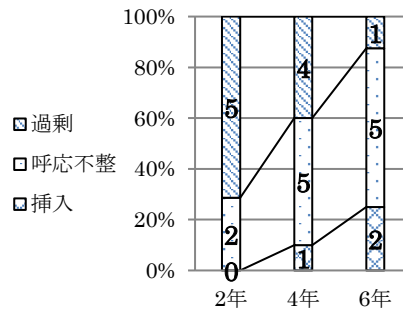


図2 タイプ別 (J)